

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

コーリング (Calling)

配給/東宝東和

2003 (平成15) 年3月28日鑑賞

<ヘラルド試写室>

Data

監督: トム・ジャドヤック

出演: ケビン・コスナー/スザンナ・トンプソン

👁️👁️ みどころ

久しぶりにケビン・コスナー主演（ほとんど出ずっぱり）の美しい夫婦愛を描いた感動モノを観た。コーリング (Calling) というタイトルも映画を観ていて「なるほど」とよくわかる。夫婦共に使命感を持ち、患者のために働く医師という設定も、今時そういう姿が少ないだけに新鮮だし、ボランティア医療に従事する「身重」の妻が豪雨の中、バスの転落事故で死亡するという設定も同情を誘う。そしてあっと驚く感動的なラスト。涙が溢れ出ることを止められないはずだ。ケビン・コスナーのファンは必見の感動作。

<コーリングとは>

この映画のタイトルである『コーリング』(Calling) とは、「呼びかけ」のこと。すなわち、ボランティア医療に従事している際中、豪雨のあおりでバスに乗って避難中、そのバスの転落事故によって死亡した最愛の妻エミリー (スザンナ・トンプソン) から、残された夫ジョー (ケビン・コスナー) に対する「呼びかけ」がテーマだ。

<最愛の夫婦は共にドクター>

ジョーとエミリーは深く愛し合っていた。そして2人の医師としての仕事は周りからも尊敬されていたうえ、お互いの仕事に使命感と誇りをもっていった。周囲の誰もが羨む最高の夫婦だった。そんなある日、妊娠しているエミリーに仕事の要請がきた。ベネズエラでの恵まれない子供たちを対象としたボランティア医療への要請だ。ジョーは「身重」の妻を気づかうが、エミリーは「私を必要とする場所があれば、どこへでも行く」と言って旅立った。そしてベネズエラでの豪雨。危険を避けるため、とにかくバスに乗ったものの、

細い山道を走るバスは心もとない。カーブでついハンドルを切りそこね、バックしようとしたが、当然地盤が弛んでいる。そして上からは土砂崩れが……。バスは転落、一路川の中へ突っ込んだ……。当然誰1人助かる者はいなかった。現地を訪れ、「遺体を発見するまではここを離れない」と言い張るジョーを係員らはなだめ、無理矢理納得させた。

<ジョーへの「Calling」は真実か幻想か？>

医師としていわば「殉死」したエミリー。最愛の妻を失ったジョーは、その「喪失感」を埋めるため、不眠不休で仕事に打ち込んだ。そんなイラ立つジョーを見かねて、上司はジョーに休暇をとるように勧めたが……。そんな折、エミリーが担当していた患者だった少年の見舞いをしたジョーは、このエミリーの患者を通して、エミリーからのさまざまな「Calling」を感じさせられた。そしてその「Calling」は、病院の中だけではなく、今やエミリーがいない自宅でも……。

エミリーはトンボが好きだった。何でもトンボは「死者の魂であり、不死と再生の象徴」とのことで、すごく深い意味をもっているらしい。それはそれとして、トンボをとりまくさまざまな事象やエミリーの患者だった少年たちが描く、「十字架のような曲線」が、さまざまな「Calling」をジョーに与え続けた。

<本来は合理主義者のジョー>

もちろんジョーは、最も冷静かつ合理的な思考が要求されるドクター。従ってジョーは科学性や合理性だけで理解できない「世界」、すなわちエミリーからの「Calling」という現実にとまどわざるをえなかったが、心のどこかでは、愛する妻が自分に呼びかけているのではないかと感じていた。そんなジョーに、「お医者様を夢見たからなれたでしょう？あなたが強く心に想われたからです。想うことで現世を作り出せるのなら、来世だってあり得る。信じさえすれば、叶えられるのです」と語ったのはシスター・マデリン。

このような話を聞いたジョーは、いつまでも死んだエミリーへの思いを断ち切れないジョーを心配する隣人や友人たちの好意を感じながらも、次第に愛するエミリーが自分に対して呼びかけていることを確信せざるを得なかった。

<ハイライトの舞台はベネズエラ>

エミリーの「Calling」の中、「奇怪な」行動をとり続けるジョーに対して、遂に病院の管理部長から「長期休暇」の命令が下された。やむをえずジョーもこれを納得。友人たちと共に川下りの冒険を楽しもうと企画した。そして遂に妻との思い出の家も売却することを決意し、トンボの置き物や妻の服も整理しようとした。その時……。紙に包んでダンボールに入れた筈のトンボの置き物や洋服ダンスからとり出した筈のエミリーの服

は……。この時、地図に印されていた十字架の曲線にジョーは気づく。そしてこの十字架の曲線は、滝の印だということがわかった。エミリーの死後、エミリーから送られてきたベネズエラでの滝をバックとした写真を思い出したジョーは、現地を訪れるため一人ベネズエラの滝へ向かった。

<無茶をするケビン・コスナー>

ケビン・コスナー主演の『メッセージ・イン・ア・ボトル』（1999年）も、この映画と同じような美しい夫婦愛を描いた心暖まる名作だったが、その映画は静かな展開だった。本作もここまでは同じような静かな展開。しかし舞台がベネズエラに移ると、突然ジョーは「そんな無茶な！」という激しい行動を見せる。すなわち、①「天候が悪くなったから、帰らなければ」というガイドの指示を無視して、1人村へ走ったり、②エミリーが乗っていたバスの残骸を川の中に発見するや、ガイドの制止を振り切って、急流の中へ1人大ジャンプしたり。そして、③急流の中、バスに到達したものの、ジョーの動きによってバランスが崩れたバスは、急流に流されてしまった。

そのため、バスの中に閉じ込められたジョーは呼吸もできず、水の中で遂に……。水中でとうとうジョーはお陀仏……。と思う中、ジョーはエミリーの「Calling」に応え、遂に2人は水の中で手をつなぎ合った……。これは夢か現実か……。そして現実の世界。ジョーはガイドの手によって命からがら救助されたのだ。

<絶対にしゃべってはならない感動的なラスト>

息を吹き返したジョーは、ガイドの制止も聞かず、更に立入りを禁止された村の中へ1人入っていった。現地の村人たちはやりをつきつけながらジョーに迫る。そんな村人たちに対して、愛するエミリーの写真を示すジョー。すると……。この人は知っている。この人には世話になった」と語る村人が……。そしてジョーは、「あの女の人の命は救えなかったが、魂は助けることができた」と語る村の女性に手をひかれて、村の奥にあるテントの中に案内された。そして、そこでジョーが見たものは……。思わずここで涙がどつと溢れてきた。何とも感動的なシーンだ。

私は昔からケビン・コスナーは大好きな俳優だったが、久しぶりにケビン・コスナーの最高の映画を観た感じ。試写会を終えて、事務所へ帰る途中、感動で胸の中はいっぱいだった。ジャンジャン。

2003（平成15）年3月31日記